轆轤首

田中貢太郎

一

肥後（ひご）の菊池家（きくちけ）に磯貝平太左衛門武行（いそがいへいたざえもんたけゆき）と云う武士があった。頗（すこぶ）る豪勇無雙（むそう）の士（さむらい）であったが、主家の滅亡後、何を感じたのか仏門に入って、怪量（かいりょう）と名乗って諸国を遍歴した。

甲斐（かい）の国を遍歴している時、某日（あるひ）唯（と）ある岩山の間で日が暮れた。そこで怪量は恰好（かっこう）な場所を見つけて、笈（おい）をおろして横になった。

横になる間もなく月が出た。その月の光が四辺（あたり）に拡がったかと思うと、その光の中から湧いて出たように

黒い影が現れた。木樵（きこり）らしい男だった。その男は周章（あわ）てたようにして怪量の傍へ往（い）った。

「御出家、此処（ここ）で野宿なさるおつもりか、とんでもないこと、此処は恐ろしい魔所でござるぞ」

怪量はおちつきすましていた。

「それは面白い、狐（きつね）が出るか、狸（たぬき）が出るか、それは知らぬが、左様な妖怪変化（へんげ）の出る場所へ野宿してこそ、諸国修行の甲斐があろうと申すものじゃ、かまわぬ、わしにかまわず、そうそう往かっしゃい」

男は怪量の顔を咎（とが）めるようにして覗（のぞ）きこんだ。

「大胆にも程のあるお方じゃ、此処へ野宿などされた

ら、それこそじゃ。さいわい近くにわしの住いがござる、荒屋（あばらや）ではあれど、此処よりはましじゃ、それに君子は危きに近寄らず、増上慢（ぞうじょうまん）は、御仏（みほとけ）もきつくお誡（いまし）めのはずではござらぬか」

怪量はごそりと起きて笈を肩にした。

「それでは一つ厄介になろうかの」

「では足元に気をつけて、おいでなされませ」

岩山の間の道を攀（よ）じのぼって、やがて唯（と）ある頂上の平べったい処へ出た。そこに草葺の家があって家の中から明るい灯が漏れていた。男は怪量を案内して裏手へ廻って往った。其処にすこしばかり野菜をつくった

畑があり、畑の向うに杉の林があって、其処から筧（かけい）の水を引いてあった。二人はその筧の水で足を洗って内へ入った。

炉（いろり）の附近（まわり）に四人の男女が控えて為（い）た。男は怪量を上座（じょうざ）へ請（しょう）じてから四人を揮（ふ）り返った。

「旅の御出家をお伴れ申したのじゃ、御挨拶申せ」

四人の者は交る交る怪量の前へ出て挨拶した。いずれも言葉は上品で態度もいやしくなかった。その後で女達は怪量に粥（かゆ）の膳をすすめた。怪量は無造作に粥を啜（すす）って、終ると口を拭（ぬぐ）い拭い主人の方を見た。

「御主人、先刻（さきほど）から御容子を伺うに、どうやら世の常

の木樵衆とも見受けられぬ、以前は一花（ひとはな）咲かした侍衆が、よくよくの仔細あっての山住いと睨んだが、いかがじゃ」

「それをお訊（たず）ねなされるか」

男は当惑したようにしていたが、やがて思いきったように顔をあげた。

「これも何かの縁、罪障消滅のたしになるかも判り申さぬ、それでは聞いて頂こうか。お察しの通り、以前はさる大名に仕えた侍でござったが、ふとした事から酒と女に心を奪われ、結局（あげく）の果は何人かの者に手をかけて、この地に隠れておる者でござるが、時が経つに

つれて浅間しく、邪慾のために、祖先を辱かしめたるこの身が恨めしゅう、此の比（ごろ）では、つくづくと後世（ごせ）のほども案じられてなりませぬわい」

「どうやら床しい御仁体と見受け申したが、さては左様でござったか」

怪量は凝（じっ）と対手（あいて）の顔を見た。

「いや、若気の誤（あやまり）は人間の常でござるわい、それにしても早くそれに気が注（つ）かれたは、まだ御仏の助けの綱の断（き）れぬ証（しる）しでござろう。昔のことは昔のこと、此上は御仏にすがって、再び花咲く春を待たるるがよろしゅうござるぞ」

「身に沁みてのお言葉、忝（かたじ）けのうござる」
山上の夜は更けた。女達は次の間へ怪量の襖（ふすま）をのべた。すすめられるままに怪量はその部屋へ入った。
「一夜の礼じゃ、せめて読経致して、主人（あるじ）の苦悩を助けて取らそうか」
枕頭（まくらもと）に端座して低声（こごえ）で読経をつづけたが、やがてよして窓を開けた。静な月の下に筧の水音ばかりが四辺（あたり）の静寂を破っていた。
「咽喉（のど）が渇いたようじゃ、彼（あ）の水を飲んでまいろう」
怪量は家（うち）の者を起さないように、そっと襖を開けて次の間へ出た。その途端に怪量は棒立になった。其処

には行燈（あんどん）の燈（ひ）に照らされて、主人はじめ五つの首のない体がころがっていた。

「はてな、すぐ隣りにいたのに、これは何としたものじゃ」

怪量は四辺（あたり）に用心しながらその傍へ近づいた。そして、一つ一つ首の附根を改めてみた。首は合せ物が離れたように血の痕（あと）もなければ刃物の痕もなかった。怪量の眼が光った。

「轆轤首じゃ、さてはたばかって、わしをおびき寄せたな」

怪量は閃（きっ）となってそれを見据えたが、やがてその眼

がきらりと光った。
「うむ、捜神記（そうしんき）か何かで読んだぞ、万一轆轤首の骸（むくろ）を見つけた時、その骸を即刻別の場所へ移しておくがよい、首が骸を移されたのを知れば、恐れ喘（あえ）いで、三たび地を打って死ぬとあったぞ。よし、妖怪（ばけもの）め」
笑（わらい）が怪量の頰にのぼった。やにわに主人（あるじ）の体を抱きあげたかと思うと、窓を開けて谷底へ投げ飛ばした。
投げ飛ばして怪量は家の中を見まわした。戸締は皆中（みななか）から厳重に出来ていた。
「さては天窓から出おったか」
怪量はそっと裏口を開けて外へ出た。外の黒々とし

た杉林の中から話声が聞えて来た。怪量は物陰から物陰を伝ってそれに近づいて往った。

　月光の影まばらな林の中には、主人（あるじ）の首をはじめ五つの首が人魂（ひとだま）のように飛び廻っていた。みんな面白そうに笑いながら、地上（じべた）や樹から虫か何かを探して喫（く）っているのであった。

　怪量は喰い入るような目で見守っていた。と、主人の首が物を喫うことを止（や）めて他の首を揮（ふ）りかえった。

「そろそろ彼（あ）の坊主を啖（く）いたいものだな、彼奴（あいつ）め、わしの言葉を真に受けやがって、頼みもせぬ経をはじめおった。経を読んでる間は近寄れないが、もう追っつ

け黎明(よあけ)に近い、坊主ももう睡ったに相違ない、睡っていたらお前達にも、彼(あ)の太った旨そうな奴を啖わしてやる、何人(たれ)か往って容子を見て来い」

一つの首が合点合点して舞いあがり、蝙蝠(こうもり)のように家の方へ飛んで往ったが、間もなくあわただしく飛び帰って来た。

「大変じゃ、大変じゃ、彼(あ)の坊主の姿が見えませぬぞ、何処かへ往ってしまいましたぞ、いや、そればかりか、大将の体を奪って往ったのか、いくら探しても、大将の体は見えませぬぞ」

主人の髪が逆立った。

「なに、おれの体が見えぬ、さては、やられたか」
主人は歯ががちがちと鳴って、その眼からは涙が出た。
「おれは、もう、元もと通りになることができぬ、此処で死ななければならぬ、よくも、人の体を動かしおったな、乞食坊主め。よし彼の坊主を啖い殺してやる、何処におる、坊主め」
主人の首は空へ舞いあがるなり、恐ろしい形相で四辺(あたり)を睨みまわした。
「おお、其処におる、其処におる、おのれ坊主め、動くな」

ひゅうと風を切って怪量に飛びかかった。それに続いて四つの首も襲いかかった。

怪量は手ごろの松の木を引っこ抜いて、縦横無尽に振りまわした。四つの首はまたたく間に地上へ落ちたが、主人の首だけは落ちずに、いつまでも怪量に飛びかかっていたが、やがて隙を見つけたのか怪量の衣の袖へ啖（く）いついた。怪量はすかさず髷（まげ）を摑んで力一ぱい撲（なぐ）りつけた。首は一声呻くなりぐったりとなってしまった。

怪量はそのまま松の木を提（ひっさ）げて家の内へ入って往った。四つの首はもう体へ帰って、血だらけになっ

て呻き苦しんでいた。

「坊主が来た、坊主が来た」

四人は我さきにと飛びだして、杉林の方へ姿を消してしまった。

その時はもう夜がほのぼの明けていた。怪量は松の木をすてて首を衣の袖から離そうとしたが、首はどうしても離れなかった。怪量は笑った。

「貴様はおれと同伴（いっしょ）におりたいか」

怪量は首を袖へつけたままで山をおり、それから信州の諏訪（すわ）へ出て平気で村から村を托鉢してまわった。

血で汚れた鬼魅（きみ）悪い首を見て女達は逃げ走った。村

の騒ぎが大きくなったので、土地の役人が出て来た。

「坊主、その首はどうしたものじゃ」

怪量はにこにこするのみで何も云わなかった。役人達は怪量を不敵な曲者として捕え、翌日白洲(しらす)へ引き出した。

「売僧(まいす)、その袖の首は、何としたものじゃや、僧侶の身にあるまじき曲事(くせごと)、有体(ありてい)に申せばよし、偽(いつわ)り申すとためにならぬぞ」

怪量は役人を見て笑った。

「いや、これは轆轤首と申す妖怪(ばけもの)の首でござる。これへついておるのは、妖怪の方から勝手に喰(く)いついたま

でで、拙僧の知ったことではござらぬ」
怪量は詳しく当時の模様を語（はな）した。時どき自分で可笑（おかし）くなると見えて大声を出して笑った。怪量を取り調べていた役人は同僚と何か相談した。そして、向き直って怪量を睨みつけた。
「売僧、そのような無稽（むけい）な申し立て、此処では通らぬぞ、察するにその方、僧侶の身にあるまじき殺生（せっしょう）を犯した故、死者の妄執（もうしゅう）晴れやらず、それへ止（とど）まっておるに相違あるまい、処（ところ）の法に照らして所刑（しおき）する」
「いや待たれい」
その時まで控席に黙々としていた年老いた役人が進

み出た。

「まだ御詮議（ごせんぎ）不充分と見受け申す、一応、首を改めて見ましょうぞ」

老役人は下役人に云いつけて、衣ごと首を手元へ取り寄せて見守っていたが、やがて驚いたように顔をあげた。

「これこそ、まごう方（かた）なき轆轤首、南方異物志（なんぽういぶつし）に、轆轤首の項（うなじ）には赤い文字が見られるとあるが、御覧なされい、これこの通りじゃ、また、離れ口が木の葉の自然と枝から離れたるがごとき模様といい、それに甲斐（かい）の国には、昔から轆轤首がおると申すから、まさ

しくこれは轆轤首、それなる御僧（ごそう）の申し立ては、いつわりではござらぬぞ」

役人達は、顔を見合わせた。老役人は怪量の方へ膝を進めた。

「旅の御僧、もはやそなたへの疑いは晴れ申したが、さるにても、斯様（かよう）は怪物を見事に御退治めされたとは、尋常（よのつね）の出家ではござるまい、お差しつかえなくば、俗名（ぞくみょう）をうけたまわりたい」

怪量は微笑した。

「疑いが晴れて何よりでござる、お訊（たず）ねを受けて名乗る程の者でもござらぬが、いかにも以前は弓矢取る身、

九州菊池の一党にて、磯貝平太左衛門武行が成れの果(は)てでござりますわい」

「なに、磯貝平太殿」

役人達は顔色をかえた。鎮西(ちんぜい)の剛の者磯貝平太の名は、この地まで聞えていたのであった。

役人達は慌(あわ)て白洲へ飛び降りて、怪量の縛(いまし)めを解いて無礼を詫びた。

二

やがて怪量は国守(こくしゅ)の館(やかた)へ呼ばれて滞在数日、無上

の面目を施（ほどこ）して出発した。
それから三日目の深夜、怪量は木曾の山中を歩いていた。
突然木立の間から怪しい漢（おとこ）が白刃を手にして躍（おど）り出た。
「坊主、身ぐるみ脱いで失せおろう」
怪量はちらりと対手（あいて）を身［＃「身」はママ］ながら衣を脱いでさしだした。
山賊はすぐ衣の首に気が注（つ）いて、その首と怪量の顔を見比べていたが、何と思ったのか飛びしさってひれ伏した。

「仮父(おやぶん)、飛んだ見損ないをいたしました、御勘弁を願います、これこの通りでございます」

怪量は面白そうに山賊を見た。

「何じゃ、どうしたのじゃ、人を裸にしておいて謝る奴があるか」

「いいえ、めっそうもない」

山賊は頭を掻(か)いた。

「こんな度胸のいい仮父衆(おやぶんしゅう)を、ただの乞食坊主と間違えて、穴があったら入りたいくらいでございます、それにしても仮父(おやぶん)、人を殺して、衣の袖へその首を付けて脅(おど)しの道具にするたあ、うまい術(て)もあったものだ、

どうでしょう、俺のこの着物へ五両つけて仮父(おやぶん)に差しあげますから、首の附いたその衣を俺に譲ってもらいたいものだが」

「なに、首を譲ってくれ、欲しくばやるが、これは人間の首ではないぞ、妖怪(ばけもの)の首じゃぞ、普通の者では扱いかねる代物じゃが、それでよいか」

「人が悪いや、人を殺して、首を袖につけて、そのうえ人をからかうのだもの、それでは仮父(おやぶん)、この通り、五両と着物をさしあげます、冗談(じょうだん)云わないで、早いところこれで手を打ってくだせえまし」

「そうか、それほどまでに所望(しょもう)なら代えてやろうか、

じゃが、五両出して妖怪(ばけもの)の首を欲しがる奴は、天下広しといえども貴様だけだろうよ、自由(かって)にせい」

三

首と衣を手に入れた山賊は、暫くその二品(ふたしな)を資手(もとで)に、木曾街道の旅人を劫(おど)していたが、間もなく諏訪(すわ)の近くへ往(い)って首の由来を聞いた。山賊は青くなった。

「やっぱり坊さんの云ったことが真箇(ほんとう)だったのか、飛んでもない、こんな首を持っていたら、どんな祟りを受けるか判らぬ。せめてこれを体と同体(いっしょ)にしてやって、

崇りのないようにしてもらおう」

　山賊は話に聞いた山の中へ入って、怪量が泊ったと云う轆轤首の家（うち）を探しているうちに、やっと探しあてたが、其処には轆轤首の体は一つもなかった。

「仕様がない、せめて首だけでも此処へ葬ってやれ、それにしても彼（あ）の坊さんは、妙な坊さんだ、ひょっとしたら、あれは、おれに悪事を止めろっていう、仏のお使いかも判らないな」

　首を埋めて塚を築くと、山賊は首をひねりひねり其処を立ち去った。その塚は後世（のちのよ）まで残っていて『ろくろ塚』と呼ばれていた。

底本：「怪奇・伝奇時代小説選集3　新怪談集」春陽文庫、春陽堂書店
　　１９９９（平成11）年12月20日第1刷発行
底本の親本：「新怪談集　物語篇」改造社
　　１９３８（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
２００４年9月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。